

一つになりたいヘミングウェイ

——“A Canary for One”をめぐる孤独な雄たち——

杉 野 久 和

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 アーネスト・ヘミングウェイ（1899-1961）は四人の女性と結婚した。1926年8月に一人目の妻ハドリー・リチャードソンと破局し、1927年5月10日に二人目の妻ポーリーン・ファイファーと結婚するまでの間に、彼は短編“A Canary for One”の執筆に取り掛かった。先行研究は、伝記的事実との関連に注目し、作品最後で「パリに終着して別居する」夫婦がヘミングウェイ夫妻と重なりあうと指摘してきた。本稿は、性の観点から考察し、男性の苦悩に焦点を当てることで、雄らしさを欠く雄鳥「一羽のカナリア」が両性具有のヘミングウェイ自身だと提示する。そして、多義的なタイトルについて新たな解釈を提案する。

I 離別と創作

アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）は生涯で四人の女性と結婚した。そのうち「最もかけがえのない伴侶」と位置付けられているのは、最初の妻ハドリー・リチャードソン（Hadley Richardson, 1891-1979）である（今村 611）。彼女へ宛てた手紙には“I would never have written any of them In Our Time, Torrents or The Sun if I had not married you”と綴っており（*Letters* 152）、その存在は「創作の源泉でもあった」（今村 611）。1921年9月3日にハドリーと結婚したヘミングウェイは、1927年4月14日に離婚、翌5月10日には二人目の妻ポーリーン・ファイファー（Pauline Pfeiffer, 1895-1951）と再婚する。これに先立つ1926年8月の時点で、アンティープからパリへ戻ってきたヘミングウェイはハドリーとの別居を開始した（Reynolds 27, 46-51）。

ハドリーとの別居によって事実上独り身となったヘミングウェイはこの時期にいくつかの短編を執筆し、再婚後の1927年10月にそれらを収録し

た短編集『女のいない男たち』（*Men Without Women*）を発表する。この短編集において「最初の妻ハドリーとの離婚をモチーフにした作品」が“A Canary for One”である¹⁾（高野 102）。この作品では、一羽のカナリアを連れた耳の悪いアメリカ婦人（“the American lady”）と一組の夫婦がパリ行きの列車に乗り合わせ会話を交わす。列車が終着し夫婦がアメリカ婦人を見送った後、作品最後の一文で“We were returning to Paris to set up separate residences”と語り手である夫により夫婦の別居が明かされ、読者に驚きを与えると同時に²⁾、この情勢がパリに到着して別居したヘミングウェイ夫妻の姿と重なり合う³⁾。

最初の妻との離別を想起させる本作品は、ヘミングウェイの他の著作に比べて先行研究の数が少ない。本短編をめぐる研究の現状について Lamb は以下の通り述べている。

“A Canary for One” was overshadowed then and has been relatively neglected ever since. The few critics who have addressed the story have mostly focused on its biographical relevance, as a fairly straightforward representation of Ernest and

Hadley's return to Paris in May 1926 to begin their separation.

(112; 日付は誤りか)

Lambによると、比較的数少ない先行研究のほとんどが提示してきたことは、語り手夫妻の離別がヘミングウェイとハドリーの離別と関連しているということである。語り手夫妻がヘミングウェイ夫妻に重ねられているというこれまでの解釈は頷けるものの、本稿で新たに指摘したいのは、語り手以外にもヘミングウェイの姿が読み取れる可能性である。

さらに、本短編のタイトルについても再考したい。最も基本的な解釈は、作中のアメリカ婦人が“I'm taking him [the canary] home to my little girl”と述べることから⁴⁾、「娘（を表す代名詞“One”）に贈られる一羽のカナリア」である。翻訳本を例に挙げると、「カナリヤのお土産」（鮎川）や「贈り物のカナリア」（西崎；高見）等と訳されている⁵⁾。構想段階におけるタイトルの一案が“Give Her a Canary”であったことから（Donaldson 203）、ヘミングウェイ自身も“a Canary”を“Her”に贈るという関係性を意識していたことは明かである。しかし、その後改変された現タイトルから読み取れる比喩的な意味については複数の解釈が存在している。今村は「原題の意味を尊重すれば『ある人へのカナリア』」と記したうえで「カナリアは一体誰に贈られるのか不明」と問題提起し⁶⁾（111），“One”が「娘」以外を表す可能性を示唆している。そして、今村のこの一節を引用した光富は、前置詞“for”に注目し“One”を四通りに解釈する⁷⁾。このように、先行研究は多様なタイトル解釈を提出してきたが⁸⁾、特定の解釈が支持されているわけではない。物語上は他の鳥でも代用可能であったにも拘らず何故“Canary”が採用されているのか、構想段階の“Give Her a Canary”と完成版の“A Canary for One”の違いは何か、という点が先行研究では論及されていない。本稿は、本作品をめぐる作品内外の男女関係に注目することで、語り手以外に含まれるヘミングウェイ像を炙り出す新たな作品解釈を提示し、その作品解釈を踏まえた新たなタイトル解釈を提案する試みで

ある。

II 「聴かない」女性たち

カナリアを贈るアメリカ婦人は、耳が不自由で「聞こえない」女性として解釈されてきた。本文中には彼女の症状を表す記述が二箇所あり、それぞれの描写を比べると症状の程度に差異がある。まず、アメリカ婦人が“a little deaf”と自覚しており、のちに語り手の男性が彼女を“really quite deaf”と推測している。先行研究は、後者を妥当とみなすことで⁹⁾、身体的な“really quite deaf”から精神的な“really quite deaf”へと比喩的な解釈を展開してきた¹⁰⁾。この根拠は、女性たちの会話に口を挟むも返答されなかった男性による推測である。アメリカ婦人が語り手夫婦はイギリス人かと問い、妻が返答する。そこで、男性が一言述べるも、アメリカ婦人はこれに反応しない。これについて、“She was really quite deaf; she read lips, and I had not looked toward her. I had looked out of the window”と、語られている。ここでは、婦人ではなく窓の外を見ながら話したことを男性が反省するかのように、唇を読まなければ理解出来ないほど婦人の耳が重症であったと気付く男性の思考過程が描出されている。つまり、返答がなかったのは男性の発言をアメリカ婦人が「聞こえていなかった」からだと男性は想像している。

しかし、短編全体を考慮すると、アメリカ婦人の耳は語り手の男性が考えるような“really quite deaf”と断定出来るか随分と疑わしい。男性の判断から暫くして、窓外を向く男性が突如発した言葉にアメリカ婦人は敏感に反応する。

We were passing three cars that had been in a wreck. They were splintered open and the roofs sagged in.

“Look,” I said. “There’s been a wreck.”

The American lady looked and saw the last car. “I was afraid of just that all night,” she said . . .

(“A Canary for One” 341)

車窓から景色を見ていた男性は三台の故障車に気づき、“Look”と声を出し事故を伝えた。即ち、男性の顔はアメリカ婦人へではなく故障車が停まっている窓外へと向いていたはずであり、婦人が男性の唇を読む機会はない。にも拘わらず、アメリカ婦人は男性の言葉につられるようにして故障車に言及している。さらに、アメリカ婦人が眠るのに恐怖を感じたほど列車が速く走っていたことを考慮すると、アメリカ婦人が全く聞き取れない(“really quite deaf”)のであれば、彼女が故障車を目撃するには男性がすぐにジェスチャーなどで伝えなければならなかったはずなのだが、その様子は読み取れない。要するに、アメリカ婦人は男性の言葉を自らの耳で聴きとって反応していたのであり、婦人が“really quite deaf”とは言い難い。これまでは男性の語りを信頼することで、他人の気持ちを推察出来ない性格の表れとしての“deaf”と考えられてきたアメリカ婦人だが、婦人の動作に注目した場合には、「(身体的に)聞こえていなかった」のではなく「(身体的に聞こえてはいるが)反応しなかった」と考えられる。

アメリカ婦人の聴覚の問題は繰り返し注目されてきたが、男性の妻もまた男性の発言にだけは無反応であるという事実も見逃してはならない。語り手夫婦の国籍を話題にする女性たちの会話に男性が口を挟むも、アメリカ婦人だけでなく妻も男性に返答せず、二人の会話は再開されていく。

“Is your husband American too?” asked the [American] lady.

“Yes,” said my wife. “We’re both Americans.”

“I thought you were English”

“Perhaps that was because I wore braces,” I said. I had started to say suspenders and changed it to braces in the mouth, to keep my English character. The American lady did not hear. She was really quite deaf; she read lips, and I had not looked toward her. I had looked out of the window. She went on talking to my wife.

“I’m so glad you’re Americans... My daughter fell in love with a man in Vevey.” She

paused. “They were simply madly in love.” She stopped again. “I took her away, of course.”

“Did she get over it?” asked my wife.

“I don’t think so,” said the American lady...

(“A Canary for One” 339; 下線筆者)

女性たちの会話を聞いていた男性は、“that was because”と彼女たちの会話との連関を明示しながら会話に参入しようと試みている。しかし、二人の女性は男性の発言に触れることなく二人だけで会話を続けている。電車の終着と同時に、夫婦が離別するという事実を考慮すれば不思議ではないのだが、アメリカ婦人と同様に男性の妻もまた、男性の発言に対してのみ「聴かない」振る舞いに徹している。

二人の女性たちは男性の目の前で会話を交わしているが、二人は揃って男性に対してのみ返答していない。即ち、二人の女性たちは男性の発言を無視しながら会話をしており、男性を排除した女性だけのホモソーシャルな関係性を構築している。これを男性の視点からみると、自分だけが除け者にされているという疎外感を感じずにはいられない。そして、女性たちの発言に比べて男性の発言が少ないという指摘も考慮すれば¹¹⁾、女性たちの言葉を聞く男性と男性の話を聞かない女性たちという関係を物語る男性の虚しさが浮かび上がる。三人は同じコンパートメント内に居合わせているにも拘わらず、二人の女性たちがホモソーシャルな関係を築いており、男性だけが孤立している。

Ⅲ 「見えない」男性／雄

ヘミングウェイ作品では「見る男」がしばしば登場するが¹²⁾、本作は女性の手によって視界を遮られる「見えない男」が描かれている点で特徴的である。作品の冒頭は車窓からの情景描写であり、“The train passed very quickly a long, red stone house with a garden and four thick palm-trees with tables under them in the shade. On the other side was the sea”と、片側には陸地が、反対側には海が見えている。しかし、アメリカ婦人が車窓のブラインドを下ろ

すことで、それまで見えていた外の景色が遮断される。

The American lady pulled the window-blind down and there was no more sea, even occasionally. On the other side there was glass, then the corridor, then an open window, and outside the window were dusty trees and an oiled road and flat fields of grapes, with grey-stone hills behind them.

(“A Canary for One” 337)

アメリカ婦人によって語り手の視界は遮られ、海は見えなくなり荒廃した生気のない陸地だけが見えている。Smith は、この後の語り手について、“the narrator’s description becomes monotonous and apparently incapable of distinguishing between the important and the trivial” と記し (357)、視界が制限され気分が浮かばない男性の語りに言及している。Donaldson は “The husband can no longer be certain of anything” とまで述べているが (209)、少なくとも、アメリカ婦人がブラインドを降ろすことによって語り手は「見えない男」となっていることは確かである。

作者ヘミングウェイを想起させる語り手の男性が「見えない男」であることが示すように、ヘミングウェイ自身も執筆当時は女性問題において先行きが「見えない男」であった。執筆当時、一人目の妻ハドリーとの関係が破綻してただけでなく、後妻となる恋人ポーリーンとの関係も決して楽観視出来たものではなかった。1926年8月にパリへ戻ってきたヘミングウェイは、妻のハドリーと別居し、その後、恋人ポーリーンとも離れることを余儀なくされる。というのも、ハドリーが離婚を認める条件として提示したのは、ポーリーンとヘミングウェイが100日間別れて暮らし、それでもなお愛し合っているということであった (Reynolds 46; Baker 174)。再び結婚生活を送れるという保障もなかった当時のヘミングウェイについて、Justice は以下の通り述べている。

While writing “A Canary for One,” Hemingway

did not know if Pauline would return from her voluntary exile. His impulse to write the story stemmed at least partially from guilt over the destruction of his marriage to Hadley, but also from the fear that his relationship with Pauline might be destroyed as well. . . . [Readers] tend to forget that Hemingway himself did not know this [the marriage to Pauline] yet and thus they read the story as concerned exclusively with Ernest and Hadley and not as a representation of his fear of losing both women. In the fall of 1926, double loss was still a possible outcome. During the story’s composition, Hemingway was thus not only feeling guilty, but also fearing that he might have risked everything for nothing.

(69)

Justice が指摘しているように後世の読者はヘミングウェイの再婚 (という顛末) を知っているが、当時のヘミングウェイにはその確証がなく、彼は二人の女性を失うかもしれない不安に苛まれていた¹³⁾。再び結婚生活を送るには、最終的に女性の判断に委ねるしかなかったのだ。先行きが見通せないヘミングウェイは、女性の手によって視界が制御されているかのような心境であったと想像出来る¹⁴⁾。

二人の「見えない男たち」——語り手と作者——は、よく重なりあうことから、これまで結び付けて考えられてきた。しかし、この二人の男たちに加えて重要な「見えない男」(あるいは「見えない雄」) が他にも描かれている。それこそが、タイトルにも含まれている一羽の “canary” である。アメリカ婦人が娘に贈る “canary” は、“The canary chirped and the feathers on his throat stood out, then he dropped his bill and pecked into his feathers again” という一文から、鳥類の「カナリア」であることが明らかである。そして、作者ヘミングウェイは、男性を表す指示代名詞 “he” や “his” を使用することで、カナリアの性別が雄 (male) であることを示している。語り手の男性や作者ヘミングウェイが妻との離別で「女のいない男たち」(短編集のタイトル) であることと同

様、カナリアも番いではなく、たった一羽で連れられており、「雌のいない雄」として二人の「見えない男たち」の境遇とよく重なりあう。さらに、車窓のブラインドが閉じられたように、“The canary from Palermo, a cloth spread over his cage”と、アメリカ婦人によって鳥籠に布が被せられ、カナリアは視界が塞がれ、外の様子を見ることが出来ない。翌朝になり、“[The America lady] had taken the cloth off the birdcage”と鳥籠を覆っていた布が彼女の手によって取り去られていることから、伴侶のいない雄のカナリアの視点になれば、語り手の男性と同様に「見えない雄」となるかどうかはアメリカ婦人の手に委ねられている。

語り手、ヘミングウェイ、カナリアはいずれも独り身の男性／雄であるという点で共通しており、いずれも女性によって「見えない」状態に陥っている。即ち、パリにやってきて離別する男性の語り手のみならず、雄のカナリアからも作者ヘミングウェイの姿を読み取ることが出来るのだ。

IV “A Canary”の両性具有性

「カナリア」(“canary”)はタイトルに含まれることもあり、これまでも考察されてきたが、「別れ」の象徴とみなされる他に¹⁵⁾、注目されてきたのは生物学上の雄としての側面である。例えば、Dolch, Hagopian, and Cunliffe が娘への「償い」(“a compensation”)と解釈するのは、恋人の男性と別れた娘に雄のカナリアが贈られるからである(97)。また、Ingman はヘミングウェイの一人目の妻ハドリーを連想し、説得的な証左は欠くも“As the American woman can be considered representative of Hadley, the canary might symbolize Hemingway”と述べ(40)、“canary”がヘミングウェイの象徴だと示唆している¹⁶⁾。雄を切り口とするこれらの先行研究は多様な解釈を可能としてきたが、本稿で注目したいのは“canary”の「雄らしさ」が揺り動かされている点である。

「雄／男らしさ」は他者との関係性から検討することが出来る。渡邊はヘミングウェイの短編「ミシガンの北で」(“Up in Michigan,” 1923)におけるジム・ギルモア(Jim Gilmore)の「男らし

さ」の表象について以下の通り論じている。

作中でのジムの表象のされ方は、読者にジムが「男らしい」男であるという印象を与える。肉体労働である鍛冶屋という職業や、森へ男たちだけで連れ立って鹿狩りに行くというホモソーシャルともとれる行動は、ジムの肉体的な「男らしさ」を強調すると共に、作中の男性と女性の区別を際立たせている。また、ジムがリズを性的対象として捉え、行動に移すこともジムのヘテロセクシャルな男性性を強調し、男性としてのジムを際立たせていると言えるだろう。

(123)

ジムの「男らしさ」を規定するのは、男性間のホモソーシャルな関係に組み込まれることと、女性とのヘテロセクシャルな関係で区別されることである。しかし、本作のカナリアは一匹でありホモソーシャルな関係もヘテロセクシャルな関係も築かない¹⁷⁾。それゆえ、「雄らしさ」を規定出来ない。「ミシガンの北で」のジムが「男らしい男」であるのに対して、本作のカナリアはヘミングウェイが描く「雄らしい雄」の姿に程遠い。

雄のカナリアは、対人的な関係性において自身の「雄らしさ」を担保出来ないどころか、実際に「女性」を包含している。アメリカ婦人が娘に贈る“canary”は、物語上、雄と設定されているものの、単語自体は「女性」を含意する。*Random House Unabridged Dictionary*では“Slang. a female singer”と表され(303)、*The New Partridge Dictionary of Slang and Unconventional English*でも“a female singer”と定義されるなど(385)、複数の辞書において俗語(slang)として“canary”が「女性歌手」を意味すると記されている¹⁸⁾——実際に、作中のカナリアは「歌っている」(“he’s singing now”)。一般的な言語使用が不特定多数にとっても理解可能な言語使用であるのに対して、俗語とは、ときに卑猥な意味や差別を含むこともある非公式な言語であり、限られた関係において使用されやすい含みのある私的な言語だといえる。本作におけるその巧妙な使用方法からは、雄の扱

いをめぐる公私の二重性が垣間見える。即ち、女性たちの会話の中で一般的な指示代名詞“he”や“him”によって雄と示されつつ俗的に「女性」を含意する“canary”には、表向きは雄として扱われている陰で雄とみなされえない雄の姿がアイロニカルに暗示されている。ヘミングウェイ自身を彷彿とさせる語り手夫妻の離別が中心的な本短編において、わざわざ「雄のカナリア」が描きこまれたのは、この性の二重性を可能たらしめるからであろう。

生物学上は雄でありながら、性的力学において、また、その言葉自体に「雄らしさ」の否定要素を有するカナリアは、両性具有（androgyny）を想起させる。これはヘミングウェイ研究においても重要な性概念であり、Spilka は以下の通り述べている。

[O]ne could at least define androgyny in his [Hemingway's] life and work as a mixture or exchange of traditionally male and female traits, roles, activities, and sexual positions.

(4)

Spilka によると、ヘミングウェイがそうであるだけでなく彼の作品にも「雄」や「雌」だけでは割り切れない両義的な性が描かれている。さらに、本短編が執筆されていた当時のヘミングウェイについて、Vernon は以下の通り述べている。

["A Simple Enquiry"] appeared in *Men Without Women* in 1927, Hemingway having written it in 1926 and 1927, between *The Sun Also Rises* and *A Farewell to Arms* — the war and postwar experiences, and gender issues, were very much on his mind ... His first three books, *In Our Time* (1925), *The Sun Also Rises* (1926), and *Men Without Women* (1927), already revealed Hemingway's curiosity about the variety of human genders and sexualities.

(97)

この時期のヘミングウェイは、「人間の性の多様

さ」(“the variety of human genders and sexualities”)という問題に直面していた。「雄らしさ」が剥ぎ取られた雄のカナリアは、まさしく性に悩むヘミングウェイと重なりあう。執筆当時 27 歳だったヘミングウェイは、妻と別れ、意中の恋人と成就する保障もなく、自身の「男らしさ」を規定しきれない不安に駆られていたのかもしれない。

V 男／雄としての願望

妻との別居を背景とする“A Canary for One”には、密かに揺らぐ「男／雄らしさ」が描出されている。本稿で取り上げた男性／雄は、いずれも、戦争での外傷による肉体的な性不全（impotence）に陥るわけではなく¹⁹⁾、社会的にも歴とした男性／雄として取り扱われており、公の目にはいわゆる「普通の男性／雄」に映るであろう。しかし、特定の女性との関係においてのみ男性としてみなされていない——少なくとも、男性／雄の視点からは自身の「男／雄らしさ」が暗に否定されている。

最後に、ここまでの議論を踏まえて、タイトル“A Canary for One”の意味を再考したい。第一義的に、“Canary”は「(鳥の)カナリア」であり、アメリカ婦人の言葉を文字通り解釈して、タイトルは従来通り「娘(を表す代名詞“One”)へ贈る一羽のカナリア」と解釈出来るだろう。そして、比喩的にはこう解釈出来る——“Canary”は性が両義的で、妻との離別によって自身の「男らしさ」を規定出来ない執筆当時のヘミングウェイ自身を投影したものであり、“A Canary”はヘミングウェイ自身を喻えた「一羽のカナリア」である。そして、これまで一心同体として歩んできた一組の夫婦が二つに別れたことでヘミングウェイが不安に感じ、「男性らしさ」を取り戻すべく再び女性とのヘテロセクシャルな関係性による(再)合一を求めていたとするならば、“One”は代名詞ではなく数詞すなわち「一(組)」と考えられないか。離婚の翌月に再婚した事実を考慮すると、当時のヘミングウェイが夫婦という一組への結びつきを切望していたとしても不思議ではないだろう。したがって、“A Canary for One”とは、「一羽の雄

のカナリア(=ヘミングウェイ)が一組への結合を願望する」ことを意味する「一(組)を望む一羽のカナリア」と解釈出来るのだ。「一組を望む」を含意するかどうかこそが、構想時の“Give Her a Canary”との最大の違いである。

複数の車両が一つに連なる“The train”から始まる本作品は、二つへ分裂する“separate residences”で結ばれている。タイトルは、改めて女性との合一を求めるヘミングウェイの思いの表れとして解釈出来るだろう。

注

- 1) 初出は1927年4月の *Scribner's Magazine*. 本稿で用いるテキストからの引用は全て“A Canary for One.” *The Short Stories*, Scribner, 2003. pp. 337-42. による。
- 2) Donaldson は “it has a surprise ending” と述べている (203)。
- 3) 例えば, Kennedy は次の通りに述べている. “Caught between two women [Hadley and Pauline], Hemingway attended the Pamplona fiesta again in 1926, with Pauline now installed as his no-so-secret lover and Hadley resigned to the dissolution of her marriage. As later transmogrified in “A Canary for One,” the final rapture occurred at the other end of a long railroad journey back to the narrator tersely observed: “We were returning to Paris to set up separate residences.”” (208)。
- 4) 同様の記述がもう一文ある (“It’s her, you know, that I’m taking the canary to” 340)。
- 5) 翻訳本の他の例として, 「贈り物のカナリヤ」(滝川; 谷口), 「贈りもののカナリヤ」(大久保)。また, 研究書での訳出例は「娘へのカナリヤ」(木村 目次), 「娘へのカナリヤ」(田代 70), 「贈物のカナリヤ」(高取 27) など。
- 6) 今村の解釈が記載されている頁の章題は「贈り物のカナリヤ」。
- 7) 前置詞 “for” の意味を「前置詞の目的語に対する利益」の場合と「交換や代表」の場合に分け論じている。詳しくは光富 52。
- 8) 今村と光富の他に, 田代によると「[タイトル]は単に『娘へのカナリヤ』を意味するだけでなく, 『誰か(娘の恋人のスイス人)の代わりのカナリヤ』とも読まれうる」(70)。
- 9) “The lady, who is really quite deaf” (Takahashi 108): 「当面の女性は面と向かって話さないと, 意の通じぬ she was really quite deaf だった」(木村 284): 「アメリカ婦人の聴覚が異常であるという事実」(田代 66)。
- 10) Ingman は “As the story progresses, it becomes increasingly clear that she [the American lady] is more than just a little deaf; she is totally insensitive

to the emotions of other people” と, 男性の判断を採用したうえで聞こえないことが他人の感情に対する無頓着の表れであると言及している (35)。また, Lamb は “[The American lady’s] physical disability figuratively mirrors her ‘inability’ to hear others” と, 身体的な “disability” を精神的な “inability” へと結びつけ論じている (135)。

- 11) Junkins は “He speaks only twelve words in the story” と指摘した注釈で “The American wife speaks about seventy words. The American lady speaks about 281 words” と語数を比較している (122, 126)。また, Donaldson は “He speaks only three times” と男性の発言回数の少なさに注目している (205)。
- 12) 性と視覚性を論じる小笠原によると「ヘミングウェイ作品においては——特に長編の主要作品においては——『見る男/見られる女』という関係が支配的と言わざるを得ない」(19)。
- 13) Fitzgerald へ宛てた 1926 年 8 月の手紙によると, “Needless to say Hadley has been grand and everything has been completely my fault in every way” とハドリーに対して贖罪の意を吐露するヘミングウェイは “insomnia” に陥っている (*Letters* 117)。
- 14) 1926 年 8 月に別居したハドリーとの関係においても, 彼女の考えが分からない不安を同年 11 月 18 日の手紙で伝えている. “I am terribly sorry that I did not get your [Hadley’s] letter until after I had seen you—and because I did not know what decisions you had made nor what was in your mind . . .” (*Letters* 150)。
- 15) Defalco 174; 田代 71 を参照。
- 16) カナリアがヘミングウェイを表すと述べる Ingman の示唆は本稿の主張と重なるが, Ingman が “one” を二人目の妻ポーリーンを表す代名詞と解釈している点 (40) で本稿とは異なる。
- 17) 語り手の男性も, ホモソーシャルな関係に組み入れられる場面はなく, コンパートメント内の女性たちから無視されておりヘテロセクシャルな関係においても無力である。
- 18) “Slang. A woman singer” (*The American Heritage Dictionary of the English Language* 278): 「歌手, 歌姫, 女性ボーカリスト」(『リーダーズ英和辞典』322): 「若い女(娘)」(『英語スラング辞典』84): 「女性歌手」(『ジーニアス英和大辞典』339); また, *Oxford English Dictionary* では, “6. A singer; esp. a female singer, a soprano” と記されており, 1862 年の使用例が掲載されている (“canary” n. 5)。
- 19) 性不全の例としては, 『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1927) のジェイク (Jake)。

書誌情報

【引用文献】

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. Charles Scribner’s Sons, 1969.

- Defalco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. U of Pittsburgh P, 1963.
- Dolch, Martin, John V. Hagopian, and W. Gordon Cunliffe. "A Canary for One." *Insight I: Analyses of American Literature*, edited by Hagopian, John V., and Martin Dolch, et al. Hirschgraben, 1962, pp. 96-99.
- Donaldson, Scott. "Preparing for the End: Hemingway's Revisions of 'A Canary for One.'" *Studies in American Fiction*, vol. 6, no. 2, 1978, pp. 203-11. *Project Muse*, doi: 10.1353/saf.1978.0002. Accessed January 14, 2020.
- Hemingway, Ernest. "A Canary for One." *The Short Stories*, Scribner, 2003, pp. 337-42.
- . *The Letters of Hemingway: Volume 3 1926-1929*. Edited by Sanderson, Rena, Sandra Spanier, and Robert W. Trogdon, Cambridge UP, 2015.
- Ingman, Trisha. "Symbolic Motifs in 'A Canary for One.'" *Linguistics in Literature*, vol. 1, no. 2, 1976, pp. 35-41.
- Junkins, Donald. "'Nothing Had Eaten Any Breakfast': Point of View and Syntax in Ernest Hemingway's 'A Canary for One.'" *The North Dakota Quarterly*, vol. 65, no. 3, 1998, pp. 120-26. Accessed January 23, 2020.
- Justice, Hilary K. "Courting Exposure: The Composition of Hemingway's 'A Canary for One.'" *Resources for American Literary Study*, vol. 27, no. 1, 2001, pp. 65-77. *Project Muse*, doi: 10.1353/rals.2001.0005. Accessed January 14, 2020.
- Kennedy, J. Gerald. "Hemingway, Hadley, and Paris: The Persistence of Desire." *The Cambridge Companion to Ernest Hemingway*, edited by Donaldson, Scott. Cambridge UP, 1996, pp. 197-220.
- Lamb, Robert Paul. "The 'Pointless' Story." *The Hemingway Short Story: A Study in Craft for Writers and Readers*, Louisiana State UP, 2013, pp. 112-50.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: An Annotated Chronology*. Oningraphics, 1991.
- Smith, Julian. "'A Canary For One': Hemingway in the Wasteland." *Studies in Short Fiction*, vol. 5, no. 4, 1968, pp. 355-61. Accessed January 23, 2020.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. U of Nebraska P, 1990.
- Takahashi, Hiroshi. "Creatures in Hemingway's Short Stories: *Les Hommages to Human Grief*." 『研究紀要』, vol. 12, no. 1. 1998, pp. 99-112. Accessed January 14, 2020.
- Vernon, Alex. "War, Gender, and Ernest Hemingway." *Hemingway: Eight Decades of Criticism*, edited by Wagner-Martin, Linda. Michigan State UP, 2009, pp. 91-114.
- Williams, Wirt. *The Tragic Art of Ernest Hemingway*. Louisiana State UP, 1981.
- 今村楯夫「贈り物のカナリア」『ヘミングウェイ大事典』今村楯夫・島村法夫監修, 勉誠出版, 2012, p. 111.
- 「ヘミングウェイ, ハドリー」『ヘミングウェイ大事典』今村楯夫・島村法夫監修, 勉誠出版, 2012, p. 611.
- 小笠原亜衣「まなざしの欲望——『エデンの園』とヘテロセクシャルな視覚性」『ヘミングウェイ研究』第6号, 2005, pp. 17-33.
- 木村達雄「A Canary for One」『ヘミングウェイ短篇手法』英宝社, 1992, pp. 276-99.
- 高取清「ヘミングウェイの女性像」『現代英米研究』第10巻, 1976, pp. 25-32. *J-Stage*, doi: 10.20802/geneiken.10.0_25. Accessed January 23, 2020.
- 高野泰志「女のいない男たち」『ヘミングウェイ大事典』今村楯夫・島村法夫監修, 勉誠出版, 2012, p. 102.
- 田代真「『贈りもののカナリア』を読む——一方通行のカナリアの歌——」『文学研究論集』第5号, 1988, pp. 65-75. Accessed January 23, 2020.
- 光富省吾「なぜアメリカ人男性は理想の夫になれるのか?: Ernest Hemingway の "A Canary for One" のアメリカ婦人に見られる階級意識」『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』第13巻, 第5号, 2014, pp. 49-55. Accessed January 23, 2020.
- 渡邊藍衣「『ミシガン』の北で」における女性の性的欲望の表層とその時代背景」『ヘミングウェイ研究』第14号, 2013, pp. 119-129.
- 【翻訳】
- 鮎川信夫訳『女のいない男たち』, 荒地出版社, 1982.
- 滝川元男訳『ヘミングウェイ全集 第1巻』, 三笠書房, 1973, pp. 209-13. 93.
- 谷口陸男編訳『ヘミングウェイ短編集 (上)』, 岩波書店, 1987.
- 大久保康雄訳『ヘミングウェイ短編集 (二)』, 新潮文庫, 1987.
- 西崎憲編訳『ヘミングウェイ短編集』, 筑摩書房, 2017.
- 高見浩訳『われらの時代・男だけの世界——ヘミングウェイ全短編1——』, 新潮文庫, 1999.
- 【辞書】
- The American Heritage Dictionary of the English Language*. 3rd ed., edited by Soukhanow, Anne H., et al. Houghton Mifflin Company, 1996.
- The New Partridge Dictionary of Slang and Unconventional English*. 2nd ed., edited by Dalzell, Tom and Terry Victor, Routledge, 2013.
- Oxford English Dictionary Online*, Oxford UP, June 2021, www.oed.com/view/Entry/53514142. Accessed July 29, 2021.
- Random House Unabridged Dictionary*. 2nd ed., edited by Flexner, Stuart Berg and Leonore Crary, Random House, Inc., 1993.
- 『英語スラング辞典』山田政美編, 研究社, 1989.
- 『ジーニアス英和大辞典』小西友七・南出康世編, 大修館書店, 2001.
- 『リーダーズ英和辞典』松田徳一郎監修, 研究社, 1991.

Hemingway's Desire for Unity : Lonesome Males of "A Canary for One"

Hisakazu SUGINO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Synopsis Ernest Hemingway (1899–1961) was married four times. After the collapse of his first marriage to Hadley Richardson in August 1926, and before his second marriage to Pauline Pfeiffer on May 10, 1927, he started to write a short story, "A Canary for One" (1927). Scholars show interest in its biographical relevance as the narrator and his wife who "were returning to Paris to set up separate residences" at the end of the work are confirmed to be representative of Hemingway and Hadley. This article, by examining sexual relationships and especially by focusing on male anguish, offers a possibility that "a canary," a male bird socially and linguistically lacking masculinity, also represents androgynous Hemingway. It then posits a new interpretation of the ambiguous title.